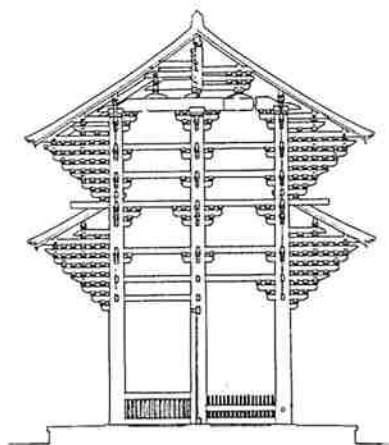


日本イコモス国内委員会

# JAPAN ICOMOS INFORMATION

第4期 第6号 1999年6月9日 発行



## 目次

ICOMOS本部の次期役員の選挙について .....	石井 昭	1
1999年次第1回理事会(拡大理事会)報告 .....	日高健一郎・他	2
ISCARSAHと日本イコモス第3小委員会の活動		
これまでの経緯と近況報告 .....	日高健一郎	6
Principles 草案(1999年5月)原文および和訳 .....		7
Principles 草案(1998年12月)に対する意見書 .....		17
歴史と構造そしてICOMOS-ISCARSAH .....	坂本 功	19
土壁の応急補修を考える .....	西澤英和	20
阪神大震災と文化財建造物の構造補強 .....	村上裕道	22
人々が生活する歴史的環境の保存への協力 - ネパールでの		
国際的な保存活動 .....	渡辺勝彦	26
事務局日誌(1999/2/1~5/31) .....	事務局	30
お知らせ - 2件 .....	山田幸正	32

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE

ICOMOS

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES/国際記念物遺跡会議

表紙 : 東大寺南大門  
COVER : Todaiji Nandaimon

# ICOMOS本部の次期役員選挙について

石井 昭

3年に1度のICOMOS総会における重要な議事の一つは本部役員改選です。本年10月17日から23日までメキシコ国内で開催される第12回総会においても、まず、初日（メキシコシティ、総会第1部）の議事の中で選挙管理委員の指名、候補者名簿の確定、等の手続きがとられ、シンポジウムその他の行事が終わったあと、最後の第6・7両日（グアダハラ、総会第2部）の議事の中で必要な投票が行なわれる予定になっています。

## 1998年次諮問委員会で承認された候補者

### 会長候補

Sherban Cantacuzino (イギリス)

Michael Petzet (ドイツ)

Maria Rosa Suarez Inclan Ducassi (スペイン)

### 事務局長候補

Jean-Louis Luxen (ベルギー)

### 財務部長候補

Abdel Aziz Daoulatli (チュニジア)

Leo van Nispen (オランダ)

### 副会長(定数5)候補

Sheridan Burke (オーストラリア)

Saleh Lamei (エジプト)

Dawson Munjeri (ジンバブエ)

Carlos Pernaut (アルゼンチン)

Esteban Prieto (ドミニカ)

Christian Schmuckle Mollard (フランス)

Ann Webster Smith (アメリカ)

Gamini Wijesuriya (スリランカ)

### 執行委員(定数12)候補

Nikos Agriantonis (ギリシア)

Maria Arias Incolla (アルゼンチン)

Ray Bondin (マルタ)

Dinu Bumbaru (カナダ)

Jose Correa (ペルー)

Tamas Fejerdy (ハンガリー)

Todor Kretev (ブルガリア)

Francisco Lopez Morales (メキシコ)

Carlos Mesen (コスタリカ)

Axel Mykleby (ノルウェー)

Yukio Nishimura (日本)

Krzysztof Pawlowski (ポーランド)

Rodolfo Ulloa Vergata (コロンビア)

ご承知のことでしょうが、本部役員とは、会長1名、事務局長1名、財務部長1名、副会長5名、執行委員12名、すなわち計5役・20名の総称です。規約には、いずれも任期3年で連続在任3期をもって限度とすること、20名はすべて異なる国(正確には異なる国内委員会)の出身でなければならないこと、などが定められています。

立候補の受付は2度に分けて行なわれます。1度目の期限は総会開催年の前年の諮問委員会議の初日。この日までに所属国内委員会の推薦を受けるなど所定の諸要件を満たす形で届出た者は、諮問委の議を経て名簿に登載され公表されます。今回の場合、ご覧の名簿がそれであって、昨年9月10-11日のストックホルム会議で承認され、ICOMOS NEWS No.3 (Dec.1998)を通じて全会員に告示されました。他方、2度目の期限は総会の初日(正確には同日午後5時)です。したがって候補者はまだ増えるかもしれません。

わが日本イコモスからは、ご承知のごとく、西村幸夫氏が執行委員に再度、立候補しております。前回同様、上位当選を

期して、会員の皆様、とりわけ総会に出席される方々のご支援をお願いします。

規約によれば、役員選挙のための投票権は1国内委員会につき最大18名に付与され、総会出席者がその数に及ばない場合は、出席者1名につき最大5票まで委任状による代理投票が認められますが、いずれにせよ、投票権者名簿と委任状とを総会開催1ヵ月前までに本部事務局(パリ)へ届けなければなりません。日本イコモスとしては、拡大理事会(6月12日・9月11日)にこの件を諮ったうえで所定の手続きを進めますので、もし、総会への出席を予定しながら当方へその旨をまだ通報しておられない方がありましたら、至急お申し出ください。目下のところ11名の出席予定を把握しています。

## 1999 年次第 1 回理事会(拡大理事会)報告

1999 年次第 1 回理事会(拡大理事会)が、去る 3 月 13 日(土曜日)午後 1 時より 5 時 30 分まで東京・神田の学士会館で開催された。出席者は委員長：石井 昭、理事：岡田保良、日高健一郎、藤本 強、安原啓示、渡辺保弘、顧問：伊藤延男、稲垣栄三、小委員会主査：益田兼房、事務局員：我妻綾子(陪席)の各氏であった。

### [報告事項]

#### 1) 日本イコモス国内委員会関係

##### － JAPAN ICOMOS INFORMATION 第 4 期第 5 号

石井委員長より、標記の号を 3 月 5 日付で発行し、全会員 158 名と関係 15 機関(国内 7、海外 8)に郵送した旨、報告があった。

##### － 海外文化遺産の調査と保存に関する第 3 回円卓会議

岡田理事より、日本建築学会との共催による標記の会議が 99 年 2 月 5 日(金)に建築会館会議室で 30 人以上の参加者を得て開催されたとの報告があった。三宅理一・西本真一両氏の話題提供を含む会議の概要は INFORMATION 第 5 号に報告された通りである。次の第 4 回は、「海外文化遺産の保存修復と建築史」というテーマで 11 月 20 日(土)に開催を予定している。

#### 2) ICOMOS 国際専門分科委員会関係

##### － ISCARSAH 作成の PRINCIPLES 草案に対する意見書

ISCARSAH (建築遺産の構造解析と修復に関する専門分科委員会) の日本代表日高理事から、同専門委員会作成の“RECOMMENDATION” 第一部 PRINCIPLES の草案に対して、昨年 12 月の理事会決定に従い第 3 小委員会において必要な作業を進め、2 月初めに日本国内委員会の名による意見書を ISCARSAH 事務局に送付した、との報告があった。併せて、2 月 19 日(金)から 21 日(日)にかけてイギリスのマンチェスターで同専門委員会が開かれ、日高理事が出席し、PRINCIPLES 最終原案が確定したことが報告された。

##### － 文化観光国際専門分科委員会の近況

標記専門委員会の日本代表石井委員より、INFORMATION 第 5 号に収載した INTERNATIONAL CULTURAL TOURISM CHARTER の最終案について、これまでの経緯と問題点の説明、報告があった。出席者から、昨年夏の草案に比べると条文が改善され、妥当な憲章になったとの意見、観光と保存の両立を目指すその精神には、従来の ICOMOS の方向と異なる動向が見られ、今後を注視すべきであるという意見、柔軟な運用によってこの憲章は日本の文化財保護にも有益となるという意見などが述べられた。

#### 3) US/ICOMOS INTERN PROGRAM 1999 への応募者推薦

渡辺理事から、選考委員会(前野まさる、稲葉信子、渡辺保弘各理事)において希望者 3 名中より 2 名を選考し、石井委員長の推薦状を添えて応募書類一式を勇壮した旨の報告があった。US/ICOMOS による採否決定は 4 月末に本人へ通知される。この件に関連して、日本国内委員会でも米国からのインターン受け入れを早急に実現すべきことが再確認された。

## [審議事項]

### 1) 日本イコモスの組織に関する中長期的課題(継続)

INFORMATION 誌第 4 期第 1~5 号に逐次報告されてきた通り、「会員」「財政」「事務局」の 3 項にかかわる中期的課題については、拡大理事会で過去 1 年間にわたり継続審議を重ねた上、1998 年次総会(12 月 13 日開催)でも重要な協議事項として会員諸氏から意見を聴取した。その結果、依然として未解決の問題が多いとはいえ、議論自体はほとんど尽くされた観がある。こうした状況を踏まえて、石井委員長から次のような意見が示され、審議の結果、これを了承した。(1)拡大理事会における継続審議は今回をもって終える。(2)残された課題、とくに「2001 年以降の事務局を何処に置くか」などの理事会の責任で解決しなければならない課題については、相応の準備・折衝機関を設け、来年時早期に審議を再開して結論を見出すことにしたい。

### 2) 新規入会者及び退会者の承認

下記 1 名の入会と 1 名の退会について石井委員長ならびに渡辺理事から説明があり、審議の結果、両者を承認した(敬称略)。

(入会者)	(現職)	(推薦者)
南條洋雄	株式会社南条設計室代表	田原幸夫・陣内秀信
(退会者)	(事由)	
川添智利	1999 年 1 月 29 日 逝去	

### 3) 新規入会者の勧誘方針

石井委員長から、拡大理事会および年次総会の合意に沿い、今年は現会員数の約 1 割に相当する 15 人程度の新規入会を期待したい、という基本方針が示された。岡田理事(会員担当)からは、専門分野のバランスを考慮しつつ、海外で学術調査・技術交流等で活躍する専門家を含め 30 人程度の候補者を考えているとの報告があり、増田主査からも数人の候補者の紹介があった。また安原理事からは、今後会員数を補強すべき新分野としては、周辺環境を含めた遺跡保存、特にカルチュラル・ランドスケープが重要であるとの提言があった。会員数については委員長から、他国との比較例として、日本国内委員会の現会員数はドイツないしイタリアと同規模であり、毎年 15 名程度の増員により、数年後はイギリスの規模に近づくであろうとの説明があった。また、新分野については、保存・修復とそれに関わる営利行為の境界に展開する場合が多く、ビジネス化の傾向と日本イコモスの

基本姿勢をどのように整合させるかが重要であるとの点で意見が一致した。

#### 4) 国際専門委員会への参加者の増員方針

各専門委員会の内規に対応しつつ弾力的にアソシエイト・メンバーを増員しようという方針が先の 1998 年次総会で採択された。若手メンバーを含む複数の委員による国際専門委員会への参加は、Voting Member の負担軽減、委員交代の円滑化からも望ましいので、ぜひ実現させたい旨、石井委員長から提案され、これを了承した。増員が望まれる委員会としては目下のところ Vernacular Architecture (大河直躬委員)、Cultural Tourism (石井委員)、Historic Towns and Villages (上野邦一委員) があり、次回拡大理事会までに人選することにした。伊藤顧問からは、個々の専門委員会で内規等が異なり、その一例として、比較的早く設立された Wood Committee には成文化された規約がないという発言があった。

#### 5) 当面の事業計画

##### ー 研究会・講演会・懇親会・他

研究会・講演会としては、「近・現代建築について考える—その 2」(JIA 館、講師は三宅理一、南条洋雄両氏)(担当・田原理事、日高理事が説明)、「歴史的建築物の構造補強関係の研究会」(詳細未)(担当・日高理事)の開催が提案され、両者を実施に移すこととした。

##### ー 文化財保護関連憲章等研究班(第 1 小委員会)

年次総会で説明した予定よりも作業が遅れ、3 月末を目標に成果のまとめを行っているとの報告が担当の益田主査からあった。また、稲垣顧問から、大 1 小委員会の活動は続行すべきであるとのコメントがあり、これを了承した。

##### ー 出版協力・分科講座協力・他(第 2 小委員会)

近畿日本ツーリスト出版部刊「世界遺産を旅する」の監修が終了に近づいており、日本ダイナースクラブ講座「世界遺産を巡る—フランス・ドイツ」(4 月～9 月、全 9 回)を開始予定であるとの報告が、羽生主査に代って石井委員長からなされ、了承した。江東区文化センター講座「続・世界遺産を旅する」(4 月～7 月、全 8 回)を継続して引き受けることになり、石井委員長から協力依頼があった。なお、近畿日本ツーリスト「丸ノ内倶楽部」講座は先方の都合で中止することになったとの説明があり、これも併せて了承した。

##### ー 歴史的建築物構造補強研究班(第 3 小委員会)

INFORMATION 第 6 号に ISCARSAH の特集を組み、6 月に研究会を開催するという計画が日高主査から示され、これを了承した。石井委員長から、ISCARSAH とこれに対応する第 3 小委員会の活動は大いに評価できるので、その成果が会員諸氏へ伝わるよう広報にも努力を期待するとのコメントがあった。

#### 6) THE 12<sup>TH</sup> ICOMOS GENERAL ASSEMBLY (MEXICO)への対応

第 12 回総会(メキシコ)出席予定者を確認し(3 月 13 日現在、荒木伸介、石井昭、伊藤延男、大河直躬、片方信也、河野俊行、近藤公夫、杉尾邦江、西村幸の 9 氏。後日、西川幸治、土井崇司の 2 氏から申出)、出席義務のある座長および発表者のうち、希望者に対

して、国内委員会で取りまとめ、文化財保護振興財団に渡航費補助を申請するとの方針を了承した。投票権の配分と委任状の準備については後日協議することになった。

#### 7) ICOMOS 本部発行 ICOMOS NEWS への寄稿

国内委員会の活動だけでなく会員が重要な役割を果たしている国内の諸活動を短信の形にまとめて寄稿するとの方針で、石井委員長と渉外担当稲葉理事に一任することになった。

#### 8) INFORMATION 誌 第 6 号の発行計画

5 月末発行を目標として、ISCARSAH 関連記事を集め、その部分については日高理事が目次の準備と全体的調整をはかることになった。

#### 9) DIRECTORY OF ICOMOS MEMBERS のためのデータ提出

イコモス会長 Roland SILVA 氏の主導により進行中の標記ディレクトリー作成のため、石井委員長が新たに個人調査票記入用紙を作成し、郵送・回収の上、一括して提出することとした。

#### 10) HUNGARY / ICOMOS からの講師依頼

6 月 29 日から 7 月 6 日にハンガリーのエゲルで開催される SUMMER COURSE ON MONUMENT PROTECTION への講師派遣依頼(旅費支給無し、滞在費支給あり)に関し、杉尾伸太郎委員、杉尾邦江委員に依頼する方針を決め、石井委員長から打診することとした。

#### 11) 今後の理事会(拡大理事会)開催予定日時

協議の結果、3 ヶ月ごと開催の基本方針に沿い、次のように決定した。

第 2 回 6 月 12 日(土)午後 1 時

第 3 回 9 月 11 日(土)午後 1 時

第 4 回 12 月 11 日(土)午後 11 時 年次総会 午後 1 時

### [協議事項]

- 1) 伊藤顧問から、2000 年 3 月 10 日から 3 月 15 日にベツレヘムとパリで、ユネスコ主催のシンポジウム "2000 years and more in the history of structures and architecture"が開催される旨、紹介され、INFORMATION 第 6 号に案内記事掲載することを了承した。
- 2) CIVVIH(歴史的都市集落国際専門委員会)の次回会議に日本代表の上野邦一委員が欠席するとの報告があった。同委員より欠席届を先方に提出するとの前提で、これを了承した。

(文責 日高健一郎・石井昭)

## ISCARSAHと第三小委員会の活動

### —これまでの経緯と近況報告—

日高健一郎

ISCARSAH(International Scientific Committee for Analysis and Restoration of Structures of Architectural Heritage : 建築遺産の構造に関する解析と修復の国際専門委員会)は、既に” JAPAN ICOMOS INFORMATION”でもご紹介しましたが、1996年秋のソフィア総会で設立が認められたICOMOS 専門委員会です(委員長ジョルジョ・クローチ : イタリア代表)。日本国内委員会は設立直後からこれに参加し、ヴォーディング・メンバー日高健一郎、アソシエート・メンバー坂本功氏、西澤英和氏が活動中です。また、この委員会に対応して国内意見の集約と調整を行うため、国内委員会の中には第3(構造)小委員会(飯田喜四郎、金多 潔、坂本 功、中川 武、村上裕道、清水真一、西澤英和の各氏と主査日高健一郎の8名で構成)が設けられています。この小委員会は、国内委員会の主催でこれまで2回の研究会(1997年6月東京、1997年11月京都)を開催し、日本の建造物修復に関わる構造的側面を関係者各位とともに議論してきました。

委員会の主たる目的は、建築遺産を対象とする解析、保存、および構造的修復のための『推奨指針("Recommendations")』を作成し、ICOMOS 公式文書としての承認を得ることです。この試みの背景には、とすれば過度に行われる傾向にある歴史的建築物の構造補強を自制し、建築遺産の歴史的・文化的価値を守ろうとする構造技術者の自覚があります。

この種の文書には前例がないので、委員会の活動はまず文書全体の構成を議論することから始まりました。第一回会議(1997年3月、ローマ、日本からは日高およびオブザーバーとして金多潔氏、西澤英和氏が参加)に続き、第二回(1998年6月、ミュンヘン、日高が参加)、第三回(1999年2月、英国マンチェスター、日高が参加)と全体会議が開かれ、『推奨指針』全体の構成とその第一部「原則('Principles)」の内容がほぼ決まりました。これに加え、原案の作成、議案の調整等のためにこれまで数回の運営委員会(サンティアゴ・デ・コンポステーラ、アッシージ、ピトリア、アトランタ)が開かれてきました。運営委員会は、イタリア、ベルギー、フランス、日本、イギリス、アメリカ合衆国、イスラエル、ドイツ、スリランカからの代表9名によって構成されています。

"Recommendations"は、「原則('Principles)」、「ガイドライン('Guidelines)」、「補遺('Annexes)」、「語彙('Glossary)」の4部で構成され、前二者をイコモス公式文書、後二者を適宜改訂可能な付帯文書(ないし電子情報)とする予定です。理念と原則を確認する「原則」に続き、「ガイドライン」では、より具体的に、建築類型や材料固有の特性と構造補強に共通する諸事項の調整が図られ、「補遺」には関連する先進技術が収録され、最後に修復と補強に関する語彙・定義集として「語彙」が用意されます。現在、「ガイドライン」について草案確定の作業が進んでおり、並行して、英語圏のメンバーを主として「語彙」の作業も始まっています。

長い伝統と経験の上に成り立つ日本の構造補強技術ないし修復技術は、こうした国外の動向と活動、特に『推奨指針』とどのような関係を保つべきかについては意見が分れるかもしれません。しかし私は、風土と建築材料に合わせて蓄積された技術・方法に対して、国外から不要な注文を付けないで欲しい、という考えるのではなく、日本の修復を支えるそうした理念と技術を世界共通の財産と「言語」にするために、さらに可能な場合はそれを国外の事例に積極的に適用するためにも、それを国外に紹介し、位置づけて行くことが重要だと考えます。同時に、とすれば文化財修復は、経済的、政治的に余裕のある先進各国の独占事業と見なされる恐れがありますが、すでに奈良のオーセンティシティー会議で明記されたように、文化は多様であり、またその保存方法も多様ですので、各国がそれぞれ培ってきた文化財の保全と活用の歴史を、こうした文書を通じて理解し尊重することも重要です。

続くページに「原則」の原文・和訳および最終草案に対する国内委員会の意見書を掲載いたします。今後とも会員諸氏のご理解とご協力をお願いいたします。



# ISCARSAH Principles 原文および和訳

## 英語原文

### RECOMMENDATIONS FOR THE ANALYSIS, CONSERVATION AND STRUCTURAL RESTORATION OF ARCHITECTURAL HERITAGE

#### PRINCIPLES

##### 1. PURPOSE OF THE DOCUMENT

- 1.1 Structures of architectural heritage, by their very nature (material and assembly), present a number of specific challenges in diagnosis and restoration that limit the application of modern legal codes and building standards.
- 1.2 Recommendations are not only desirable but necessary in order to place relevant procedures within a rational scientific setting and within a cultural context.
- 1.3. The "Principles" presented in this document, which will be followed by more detailed guidelines, represent the first steps towards the preparation of Recommendations, an indispensable tool for all those involved with conservation and structural restoration problems.

##### 2. GENERAL CRITERIA

- 2.1. Conservation, reinforcement and restoration of architectural heritage requires a multi-disciplinary approach.
- 2.2. Value and authenticity of architectural heritage cannot be based on fixed criteria because the respect due to all cultures also requires that its physical heritage be considered within the cultural context to which it belongs.
- 2.3. The value of architectural heritage is not only on its appearance, but on the integrity of all its components; in particular the removal of the inner structures maintaining only the façades should be avoided.

## フランス語原文

### RECOMMANDATIONS POUR L'ANALYSE, LA CONSERVATION ET LA RESTAURATION DES STRUCTURES DU PATRIMOINE ARCHITECTURAL.

#### PRINCIPES GENERAUX

##### 1. BUT DU DOCUMENT

- 1.1. Les édifices anciens par leur nature (matériaux et mises en œuvre) imposent des démarches particulières pour le diagnostic et la restauration qui limitent l'application des normes légales et de construction applicables.
- 1.2. Des recommandations ne sont pas seulement souhaitables, elles sont nécessaires afin de garantir que les procédures relatives à la restauration des structures soient adaptées au contexte rationnel, scientifique et culturel.
- 1.3. Les "PRINCIPES" présentés dans ce document, qui seront suivis de directives, constituent la première étape vers la préparation des recommandations, instrument indispensable pour tous les intervenants de la conservation et de la restauration des structures.

##### 2. CRITÈRES GÉNÉRAUX.

- 2.1. La conservation, le renforcement et la restauration des structures du patrimoine architectural requièrent une approche pluridisciplinaire.
- 2.2. Par respect envers chaque culture; le patrimoine doit être étudié dans son contexte culturel, par conséquent la valeur et le niveau d'authenticité ne sont pas déterminés par des critères universels.
- 2.3. La valeur d'un édifice historique n'est pas limitée à la perception que l'on a de celui-ci. Elle dépend de l'intégrité de toutes les parties qui le composent. Par conséquent la suppression de structures internes pour ne maintenir que les façades devra toujours être évitée.

- 2.4. When any change of use or function is required to better preserve and maintain the architectural heritage, all the conservation requirements and safety conditions have to be carefully taken into account.
- 2.5. Restoration of the structure in Architecture Heritage is not an end in itself but a means to an end because what is important is the building as a whole and not the structure.
- 2.6. The peculiarity of heritage structures with their complex history, requires the organisation of studies and proposals in precise steps that are similar to those used in medicine. The steps are: anamnesis, diagnosis, therapy and controls, respectively corresponding to the research to acquire significant data and information, identification of the causes of damage and decay, choice of the remedial measures and control of the efficiency of the interventions. In order to achieve minimal impact on architectural heritage, using funds available in a rational way, it is usually necessary that the study repeats these steps in an iterative process.
- 2.7. No action should be undertaken without having ascertained the achievable benefit and the harm to the architectural heritage, except in the case when urgent safeguard measures are necessary to avoid the imminent collapse of the structures (e.g. after seismic damages); those measures, however, should not modify the fabric in an irreversible way.
- 2.4. Si des changements d'usage ou de fonction sont garants d'une meilleure conservation et de l'entretien du patrimoine, les exigences de la conservation et les conditions de sécurité doivent être soigneusement prises en compte.
- 2.5. La conservation ou la restauration des structures du patrimoine architectural n'est pas une fin en soi, c'est un moyen au service d'un objectif plus large: la pérennité de l'édifice dans sa globalité.
- 2.6. Les structures historiques, en raison de leur histoire souvent complexe, nécessitent la mise en œuvre d'études et de projets suivant des phases précises, comme dans la médecine: l'anamnèse, la thérapie et le contrôle. A chaque phase correspond la recherche appropriée pour la collecte des données et des informations pour identifier les causes des désordres, pour déterminer le choix des mesures à prendre, et pour contrôler ensuite leur efficacité. Afin que l'impact sur le patrimoine soit minimal il faut employer les ressources disponibles d'une manière rationnelle. Il est généralement nécessaires que ces étapes se succèdent dans un processus itératif.
- 2.7. Aucune action ne doit être entreprise sans avoir préalablement évalué les effets négatifs sur l'édifice historique, excepté dans le cas où des mesures urgentes de sauvegarde sont nécessaires pour empêcher un effondrement imminent de la structure (p.ex. après des dommages sismiques); néanmoins ces mesures ne doivent pas changer la structure d'une manière irréversible.

### 3. RESEARCH AND DIAGNOSIS

- 3.1. Usually a multidisciplinary team, to be determined in relation to the type and scale of the problem, should work together from the first steps of a study - as in the pre-survey of the site and the preparation of the investigation programme.
- 3.2. Data and information can first be processed approximately just to establish a more comprehensive plan of activities in proportion to the real problems of the structure.
- 3.3. A full understanding of the structural and material characteristics is required in conservation practice. Information is essential on the original conception of the

### 3. RECHERCHE ET DIAGNOSTIC.

- 3.1 En général une équipe pluri-disciplinaire, composé selon le type et l'échelle du problème, devrait être constitué dès la première phase de l'étude - comme dans le relevé préalable du site et dans la préparation du programme d'investigations.
- 3.2 Les données et les informations peuvent être étudiées une première fois d'une manière approximative afin d'établir un plan d'action approprié au problème réel de la structure.
- 3.3 Une compréhension claire de la typologie, du comportement, des performances des structures et des caractéristiques des matériaux est nécessaire dans l'exercice de

structure in its original and earlier states, on the techniques that were used in the construction, on the alterations and their effects, on the phenomena that have occurred, and, finally, on its present state.

- 3.4. In archaeological sites specific problems may be posed because the structures have to be stabilized in the stage of the excavation when the knowledge is not yet complete. The structural responses to a "resuscitation" of the building may be completely different from those of an "exposed" building. Also different are the investigation plans and the quick site-structural-solutions, in order to not compromise the complete building's shape, vision and use.
- 3.5. Diagnosis is based on historical, qualitative and quantitative approaches; the former being mainly based on direct observation of the structural damage and material decay as well as historical and archaeological research, and the latter mainly on material and structural tests, monitoring and structural analysis.
- 3.6. Before making a decision on structural intervention it is first indispensable to determine the causes of damage and decay, and then to evaluate the safety level of the structure.
- 3.7. The safety evaluation, that is the last step of the diagnosis, where the effective need of treatment measures is determined, should reconcile with both qualitative and quantitative analysis: direct observation, historical research, structural analysis and, if the case, experiments and tests.
- 3.8. Often the application of the same safety levels as in the design of new buildings requires excessive if not impossible measures. In these cases specific analyses and appropriate considerations may justify different approaches to safety.
- 3.9. All aspects related to the acquired information, the diagnosis, including the safety evaluation, and the decision of intervention should be described in an "Explanatory report."

la conservation. La connaissance de la conception originelle des structures, des techniques employées lors de la construction, des transformations, des phénomènes vécus, et de leur état actuel est essentielle.

- 3.4. Les structures des vestiges archéologiques posent des problèmes particuliers car elles nécessitent des interventions de stabilisation pendant les phases d'excavation quand la connaissance est encore incomplète. Le comportement structurel d'une construction en cours de fouille peut être complètement différent d'une construction exposée. Ainsi les projets d'interventions et les solutions adoptées peuvent être différents afin de ne pas compromettre l'aspect, l'apparence et l'usage de la construction.
- 3.5. La conservation des structures du patrimoine bâti requiert simultanément des analyses qualitatives et quantitatives. Les premières sont fondées sur l'observation directe des désordres et de la dégradation des matériaux. Elles s'appuient sur les recherches historiques et archéologiques. Les secondes concernent essentiellement les tests spécifiques, le suivi des données et l'analyse des structures.
- 3.6. Avant de prendre une décision concernant une intervention sur des structures il est indispensable de déterminer les causes des désordres, et ensuite d'évaluer le niveau de sécurité de la structure.
- 3.7. L'évaluation du niveau de sécurité (qui est la dernière étape dans le diagnostic ou le besoin de traitements est effectivement déterminé) doit tenir compte des analyses quantitatives et qualitatives et de l'observation directe, des recherches historiques, de la modélisation mathématique le cas échéant et, en tant que besoin des résultats expérimentaux.
- 3.8. Le plus souvent l'application de coefficients de sécurité conçus pour les ouvrages neufs conduit à des mesures excessives, inapplicables pour les édifices anciens. Des analyses spécifiques devront alors justifier de la diminution des niveaux de sécurité.
- 3.9. Toutes les informations sur la documentation réunie, sur le diagnostic, sur l'évaluation de la sécurité et sur les propositions d'intervention doivent être consignées dans un rapport de

présentation explicite.

#### 4. REMEDIAL MEASURES AND CONTROLS

- 4.1. Therapy should address root causes rather than symptoms.
- 4.2. The best therapy is preventive maintenance.
- 4.3. Safety evaluation and an understanding of the significance of the structure should be the basis for conservation and reinforcement measures.
- 4.4. No actions should be undertaken without demonstrating that they are indispensable.
- 4.5. Each intervention should be in proportion to the safety objectives set, thus keeping intervention to the minimum level to guarantee safety and durability with the least harm to heritage values.
- 4.6. The design of interventions should be based on a clear understanding of the kinds of actions that were the cause of the damage and decay because this design will dependent upon them.
- 4.7. The choice between "traditional" and "innovative" techniques should be weighed on a case-by-case basis and preference given to those that are least invasive and most compatible with heritage values, bearing in mind the safety and durability requirements.
- 4.8. At times the difficulty of evaluating the real safety levels and the possible benefits of interventions may suggest an "observational method", i.e. an incremental approach, starting from a minimum level of intervention, with possible subsequent adoption of supplementary or corrective measures.
- 4.9. Where possible, any measures adopted should be "reversible", so that, if and when new knowledge is acquired, they can be removed and replaced with more suitable measures. Where they are not completely reversible, interventions should not limit further interventions.

#### 4. LES REMÈDES ET LE CONTRÔLE.

- 4.1 La thérapie représente le champ des actions exercées sur les causes profondes des désordres, et non sur les symptômes.
- 4.2 La meilleure thérapie pour la conservation est l'entretien préventif.
- 4.3 La compréhension de la signification de la structure, et l'évaluation de son niveau de sécurité conditionnent les mesures de conservation et de renforcement.
- 4.4 Aucune action de doit être entreprise sans que son caractère indispensable n'ait été démontré.
- 4.5 Les interventions doivent être proportionnées aux objectifs de sécurité fixés et être maintenues au niveau minimal garantissant stabilité et durabilité avec le minimum d'effets négatifs sur la valeur du bien considéré.
- 4.6 La conception du projet d'intervention sera toujours fondée sur une bonne connaissance des causes des désordres et de la dégradation.
- 4.7 Le choix entre les techniques "traditionnelles" et les techniques "innovantes" doit être fait au cas par cas, en donnant la préférence aux techniques les moins envahissantes et les plus respectueuses des valeurs patrimoniales, tenant en compte les exigences de sécurité et de durabilité.
- 4.8 Parfois les difficultés rencontrées pour le contrôle des véritables niveaux de sécurité et les résultats positifs de l'intervention peuvent conduire à recourir à une démarche progressive, en commençant à un niveau minimum, et en adoptant ultérieurement une série des mesures supplémentaires ou correctives.
- 4.9 Les mesures choisies doivent être réversibles autant que possible, de telles sorte que, si de nouvelles connaissances le permettent, des mesures plus adéquates puissent être mises en oeuvre. Si les mesures ne peuvent être réversibles, on doit s'assurer que des interventions ultérieures puissent encore intervenir.

- 4.10. The characteristics of materials used in restoration work (and in particular new ones) and their compatibility with existing materials should be fully established. This must include long term impacts, so that undesirable side-effects are avoided.
- 4.11. The distinguishing qualities of the structure and its environment, in its original or earlier states, should not be destroyed.
- 4.12. Each intervention should, as far as possible, respect the concept, techniques and historical value in the original or earlier states of the structure and leave traces to be recognized in the future.
- 4.13. Intervention should be the result of an overall integrated plan that gives more or less weight, as appropriately, to the different aspects of architecture, structure, installations and functionality.
- 4.14. The removal or alteration of any historic material or distinctive architectural features should be avoided whenever possible.
- 4.15. Deteriorated structures should be repaired rather than replaced, whenever possible.
- 4.16. Imperfections and alterations, when they have become part of the history of the structure, should be maintained so far as they do not compromise the safety requirements.
- 4.17. Dismantling and reassembly should be undertaken as an optional measure required by the very nature of the materials and of the structure when the conservation is impossible, or harmful, by other means.
- 4.18. Provisional safeguard systems used during the intervention should show their purpose and function without creating any harm to heritage values.
- 4.19. Any proposal for intervention must be accompanied by a programme of control to be carried out, as far as possible, while the work is in progress.
- 4.10 Tous les matériaux utilisés pour les travaux de restauration, particulièrement les nouveaux matériaux, doivent être testés de manière approfondie et apporter les preuves non seulement de leurs caractéristiques mais également de leur compatibilité avec les matériaux d'origine, afin d'éviter les effets secondaires non souhaitables.
- 4.11 Les qualités intrinsèques d'une structure et de son environnement, dans son état premier ou modifié à son avantage par l'histoire, doivent être conservées.
- 4.12 Chaque intervention doit autant que possible respecter le concept originel, les techniques et la valeur historique des états précédents de la structure et en laisser des traces reconnaissables pour l'avenir.
- 4.13 L'intervention doit être le résultat d'un projet d'ensemble intégré qui permettra de donner une échelle de valeurs aux éléments architecturaux, structuraux et fonctionnels.
- 4.14 La dépose ou l'altération de matériaux historiques ou de caractéristiques de l'architecture doivent être évités autant que possible.
- 4.15 On choisira toujours de réparer plutôt que de remplacer les parties détériorées des structures anciennes.
- 4.16 Les imperfections et altérations non réversibles devenues parties intégrantes de l'histoire de la structure doivent être maintenues lorsqu'elles ne compromettent pas les exigences de sécurité.
- 4.17 Le démontage et la reconstruction doivent être considérés comme des interventions exceptionnelles résultant de la nature des matériaux et de la structure, dans le cas où la conservation avec d'autre moyens est impossible ou nuisible.
- 4.18 Les mesures de sécurité employées lors des interventions doivent clairement montrer leur objectif et leur fonction, sans causer de dommages à la valeur de l'objet traité.
- 4.19 Chaque proposition d'intervention doit être accompagnée d'un programme de contrôle à mettre en œuvre, autant que possible, quand les travaux sont en cours d'exécution.

4.20 Measures that are impossible to control during the execution should not be allowed.

4.20 Les interventions qui ne peuvent faire l'objet de contrôle pendant leur exécution sont interdites.

4.21 Checks and monitoring during and after the intervention should be carried out to ascertain the efficacy of the results.

4.21 Chaque intervention sur les structures doit être accompagnée de mesures de contrôle pendant sa mise en œuvre puis sur le long terme pour s'assurer de son efficacité.

4.22 All the activities of checks and monitoring should be documented and kept as part of the history of the structure.

4.22 Toutes activités de contrôle et de suivi doivent être documentées comme faisant partie de l'histoire de la structure.

May 21, 1999

Le 21 mai 1999

## 『〈歴史的建築物の構造補強に関する〉原則』

[ ] …各項目の要約として、訳者が便宜上付け加えた語句を示す括弧

( ) …原文で挿入されていた括弧

〈 〉 …補われた訳語を言いかえのために挿入された語を示す括弧

(和訳作成: 日高健一郎)

### 1. 本文書の目的

#### 1.1 [建築遺産の構造的修復の特殊性]

建築遺産の構造はその本来の性質(材料及び架構法)により、診断と修復において数多くの特殊な問題を示すので、現代の法規、及び建築基準の適用は限定される。

#### 1.2 [推奨指針の必要性]

推奨指針は、関連する措置を合理的な科学的設定と文化的文脈の中に位置づけるために望ましいばかりでなく、必要でもある。

【注】 旧原案では文書の目的と必要性に関する、より一般的な前文がついていたが、最終案ではそれがより簡潔に 1.1、1.2 の 2 項目にまとめられた。

#### 1.3 [『原則』の位置づけ]

本文書で示される『原則』は、より詳細なガイドラインに先行し、保存と構造的修復の諸問題に関与する全ての人々にとって不可欠な道具である推奨指針を準備に向けた第一段階である。

### 2. 一般規範

#### 2.1 [学際性]

建築遺産の保存、補強、および修復には学際的取り組みが必要である。

#### 2.2 [文化の多様性に応じた多様性]

建築遺産の価値とオーセンティシティは、固定した規範の上に位置づけることはできない。すべての文化を尊重するということは、必然的に、その有形遺産をそれが属する文化的文脈の中で捉

えることを求めるからである。

### 2.3 [インテグリティの重要性とファサードへの批判]

建築遺産の価値はその外見のみにあるのではなく、その諸部分のインテグリティ（総体性）にある。特にファサードのみを維持し、内部の構造を除去することは避けられるべきである。

〔注〕 最終案で加えられた項目であり、ファサードのみの保存による過去の成功例もあって議論の対象となったが、ファサードの回避という世界的動向に従って表記のような表現となった。

### 2.4 [活用・転用と保存条件・安全条件の均衡]

建築遺産をより良く保護し維持するために、使用法と機能を何らかの形で変更する場合、その保存に関わるあらゆる要求と安全条件が、注意深く考慮されなければならない。

〔注〕 旧原案では活用と転用が原則として禁止されていたが、日本側意見及びその同調意見により保存にとって有益な活用と転用が許容されることになった。

### 2.5 [構造的修復の意味]

建築遺産における構造の修復はそれ自体が目的であるのではなく、目的に至る手段に過ぎない。というのも重要なのは全体としての建築物であり、構造ではないからである。

### 2.6 [医学に類する方法論とその反復]

遺産の構造には複雑な歴史が伴うので、その特殊性のゆえにその研究と修復計画には医学で用いられるものに類する明確な段階による組織化が必要である。その段階とは、履歴、診断、治療、及び管理であり、それぞれ重要なデータと情報を収集するための研究、損傷と劣化の原因の特定、治療手段（修復方法）の選択、及び修復行為の有効性の管理に対応する。使用し得る資金を合理的な方法で使い、建築遺産への影響を最小限にとどめるために、研究にあたってはこれらの段階を繰り返して適用することが通常必要である。

### 2.7 [作業効果の確認と緊急安全保護手段]

いかなる作業も、建築遺産に及ぼし得る利益と危害を予め確認することなく実施してはならない。ただし、構造の差し迫った崩落（例えば地震による損傷の後）を避けるために緊急の安全保護手段が必要となる場合は、その例外である。しかしこのような措置は、建築物を不可逆的方法で改変してはならない。

〔注〕 旧原案は作業効果の確認のみを規定していたが、最終案では緊急時の安全保護手段に関する文言が加えられた。

## 3. 研究と診断

### 3.1 [学際的作業の必要性]

通常、課題の種類と規模に対応して決まる学際的なチームが研究の第一段 — 現場の事前調査及び調査計画の準備など — から共同で作業をすべきである。

〔注〕 最終案 3 章に対応する旧原案 2 章の表題「解析と診断」は最終案で表記のように改められ、解析に変わってより一般的な「研究」という表現になった。

### 3.2 [データと情報の近似的処理]

データと情報は、構造の真の問題に対応したより包括的な作業計画を構築するために、まず近似的に処理される場合がある。

### 3.3 [前提となる理解及び情報]

保存の実践においては、構造と材料に関わる特性の完全な理解が要求される。創建時及びそれ以降における構造の概念、施工において用いられた技術、改変とその効果、生起してきた現象、そし